

日本英文学会北海道支部 第58回大会プログラム

日時：平成25年10月5日(土)・6日(日)
会場：北海道大学 人文社会科学総合教育研究棟
(札幌市北区北10条西7丁目 ※北大総合博物館前)

<会場アクセス・地図>

・最寄駅はJR「札幌駅」(西改札口を出て、北口から北大にお向かい下さい)、または地下鉄南北線「北12条駅」です。いずれも徒歩10~15分ほどで到着します。



→北

(懇親会のご案内)

日時：10月5日(土) 18:00~20:00

場所：ファカルティハウス エンレイソウ(北11条西8丁目)

一般5000円、学生2500円

*懇親会参加希望の方は、9月25日(水)までに、下記担当までにご連絡頂けますようお願い申し上げます。

北海道大学文学部 宮下 弥生

Eメール：yayoi(at)let.hokudai.ac.jp

(件名に「懇親会参加希望」とお書き下さい。また、(at)は@に置き換えて下さい)

多くの皆さまのご参加申し込みをお待ちしております。

- * 書籍展示 (W棟3階エレベーター前ホール)
- * 発表者・参加者控室 (W516教室) お茶とお菓子の用意があります。
- * 大会期間二日目、大学食堂・生協は開店しておりません。大変申し訳ありませんが各自で
ご用意頂けましたら有難く存じます。

10月5日(土)

受付開始 (13:00 ~) (W棟3階エレベーター前)

理事会 (12:45 ~) (W516教室)

開会式 (13:50 ~) (W309教室)

開会の辞 日本英文学会北海道支部支部長 高橋 英光

〈文学部門〉 (W408教室)

研究発表 (14:00 ~ 15:10)

司会 北海学園大学 上村 仁司

1. (14:00~) 独歩とワーズワース —「小民」をめぐって—
道都大学 横田 肇

司会 東北学院大学 井出 達郎

2. (14:35~) 永久に彷徨える人々—“The Curious Case of Benjamin Button”と *The Wandering Jew*—
北海道大学大学院 松浦 和宏

特別講演 (16:00 ~ 17:25)

司会 東北学院大学 井出 達郎

南北戦争期におけるマーク・トウェインのふるまい
立教大学 後藤 和彦 氏

〈語学部門〉 (W309教室)

市河三喜賞受賞記念講演 (14:00~14:50)

司会 札幌学院大学 眞田 敬介

英語の命令文—神話と現実
北海道大学 高橋 英光 氏

セミナー (15:00～16:20)

司会	札幌大学	濱田 英人
生態心理学から考える文法とコミュニケーション		
	神戸市外国語大学	本多 啓 氏

特別講演 (16:30 ～ 17:45)

司会	札幌大学	對馬 康博
懸垂分詞構文から見える日英比較分析—事態認知・事態報告と視点とジャンル		
	大阪大学	早瀬 尚子 氏

懇親会 (18:00～20:00)

場所：ファカルティハウス エンレイソウ (北11条西8丁目)

10月6日(日)

〈文学部門〉

研究発表 (W408 教室)

- | | | |
|--------------|---|-------|
| 司会 | 札幌医科大学 | 森岡 伸 |
| 1. (11:00 ～) | <i>De Profundis</i> に見る Wilde を監獄へ送った権力 | |
| | 北海道教育大学大学院 | 本間 里美 |
| 2. (11:35 ～) | 母性の見なおし—『波』におけるウルフの技巧— | |
| | 千歳科学技術大学 | 金井 彩香 |

シンポジウム (13:30 ～ 16:00)

Lost/Found in Cinematisation—文学作品の映像化をめぐる—

司会・講師：	北海道薬科大学	板倉 宏予
講師：	北海道武蔵女子短期大学	沢辺 裕子
講師：	北海道大学	熊谷 由美子
講師：	北海道大学	及川 陽子

〈語学部門〉 (W309 教室)

研究発表 (10:00 ~ 12:25)

- | | | | |
|--------------|----|---|---------|
| | 司会 | 岐阜工業高等専門学校 | 菅原 崇 |
| 1. (10:00 ~) | | 間接指令文が選択される機能的要因の分析
北海道大学大学院 | 鈴木 大路郎 |
| 2. (10:35 ~) | | 項削除と(非)焦点化効果
北海道大学 | 奥 聡 |
| (5分休憩) | | | |
| | 司会 | 北海道文教大学 | 高橋 保夫 |
| 3. (11:15 ~) | | 主動詞 + to 不定詞、または-Ing 形の適合性
北海道大学大学院 | 渡辺 一真 |
| 4. (11:50 ~) | | 知覚動詞構文の受動文における to do の意味機能について
札幌大学大学院 | 佐々木 昌太郎 |

シンポジウム (13:30 ~ 16:00)

人間と言語

- | | | |
|-----|-------|-------|
| 司会: | 札幌大学 | 濱田 英人 |
| 講師: | 北海道大学 | 奥 聡 |
| 講師: | 北海道大学 | 野村 益寛 |

閉会式 (16:00 ~) (W309 教室)

閉会の辞 日本英文学会北海道支部副支部長 竹本 幸博

<第一日：10月5日（土）>

<文学部門：研究発表>

独歩とワーズワース―「小民」をめぐる―

横田 肇（道都大学）

国木田独歩（以下、独歩）は自然の理解で William Wordsworth（以下、ワーズワース）に共感したが、自然と暮らす人々の理解でも独歩はワーズワースに共感し、学んだことが多いと考えられる。

今回は、「富岡先生」と処女作「源叔父」を取り上げ、各作品とワーズワースとの関係について述べる。

「源叔父」はワーズワースの”Michael”を踏まえて書かれたとされるが、”Michael”におけるマイケルの心理、息子への愛情、世代間の葛藤等が「源叔父」ではあまり問われず、その意味で「源叔父」での独歩は”Michael”を消化しきれていない。

それに対し、「富岡先生」では富岡老人の心、娘や教え子たちとの葛藤、時代や社会との関わりの中でのそれが描かれ、より “Michael” の世界に近づいている。

本発表では、主人公としての富岡、源叔父とマイケルの比較を世代や時代との関わりで行い、「源叔父」と「富岡先生」における独歩のマイケル理解、ワーズワース理解について論じる。

永久に彷徨える人々―“The Curious Case of Benjamin Button”と *The Wandering Jew*―

松浦 和宏（北海道大学大学院）

本発表では、F. Scott Fitzgerald の “The Curious Case of Benjamin Button”（1921）とキリスト教の伝説である *The Wandering Jew* が共有している点を指摘する。その上で、Fitzgerald の作品群における本短編作品の位置づけと他作品との関連性を考察する。

“The Curious Case of Benjamin Button” は Fitzgerald の短編小説の中で立ち位置の定まらない作品である。老人として生まれた主人公 Benjamin Button が、歳を経るにしたがって逆に若返っていくというストーリーは、Fitzgerald の短編小説の中でも極めて異色であり、それ故にこれまでの批評においても様々な評価がなされている。

The Wandering Jew は、古くから伝わるキリスト教の伝説である。ゴルゴダの丘に向かうイエスに一杯の水を求められたユダヤ人の靴職人は、その願いを拒否する。その結果、彼はキリスト再臨の時まで死ぬ事が出来ず、世界を彷徨う運命となってしまう。

本発表では、この短編作品が *The Wandering Jew* といくつかの共通点を有している点を指摘すると同時に、そのような点を明らかにする事で、“The Curious Case of Benjamin Button” と Fitzgerald の他の短編作品や中編小説との関連性も考察したい。

<文学部門：特別講演>

南北戦争期におけるマーク・トウェインのふるまい

後藤 和彦 (立教大学)

南北戦争がいよいよ始まるかというあたりから、少なくとも 1863 年 (奇しくも今から 150 年前) の 2 月に筆名“Mark Twain”が誕生するころまで、マーク・トウェイン (というよりサミュエル・クレメンズ) のふるまいは依然としてよくわかっていない。よくわからないのはそれを知る手立てがあまりないからなのだが、だとしたら、ただの端くれといえども学者たるものの手を出すべきことではないのかもしれない。作家晩年について立派な研究もある William Macnaughton はこの時代のトウェインについて語らずにおくのはもったいないと思ったのか (私がそうであるように)、大学を退職後、小説という形で (くわえて William ではなく Bill Macnaughton と署名しつつ) ようやくそれについて発表したのだった。管見した限りだが、トウェインの動乱期についての研究もいくつか出始めているし (Joe B. Fulton、Jerome Loving)、私に惜しむべき学者としてのメンツもあればこそ (旅の恥はかきすてともいうし)、粗末な想像をたくましくしつつこの時代のトウェインについて話してみたい。どこかで聞いたことがあるタイトルだと北海道の皆さんならば気づいてくださることを祈りつつ

<語学部門：市河三喜賞受賞記念講演>

英語の命令文—神話と現実

高橋 英光 (北海道大学)

英語の命令文を英文法書・言語学書で調べると、Get up!/Pass me the salt! などの例文と共に「話し手が聞き手に指令して行動させる文」、「動作動詞は使えるが状態動詞(例えば own, resemble)は使えない」、「直接的で丁寧さに欠け依頼では使用を避けるべき文」という説明が見られる。

しかし、Do that (and I'll punish you).や Let me put it this way. は命令文だが聞き手に指令し行動させているとは思えない。またひと口に動作動詞と言っても英語には数百個ありどれが命令文で頻繁に用いられるのだろうか。命令文が直接的すぎるのなら英語話者は代わりに間接的表現 (例えば Can you? など) を頻繁に使っていることになるが、それは事実だろうか? 本発表は、量的分析と質的分析を組み合わせ、これらの疑問に答えつつ英語命令文の特徴づけを試みたい。

<語学部門：セミナー>

生態心理学から考える文法とコミュニケーション

本多 啓 (神戸市外国語大学)

認知意味論は言語の意味の基盤として人間の経験を重視する。環境の中で人間がどのような経験をするかに関して、知覚と行為を一体と見る生態心理学は重要な示唆を与えてくれる。本発表では、文法とコミュニケーションを考える上で生態心理学の知見がどのような可能性を開いてくれるかを、いくつかの言語現象を題材として考えていく。特に「自己知覚の遍在性」「アフォーダンスの知覚」「共同注意とコミュニケーション」を取り上げたい。

自己知覚の遍在性に関しては、*The students get younger every year.*などのいわゆる「主観的」な表現を取り上げ、複雑な道具立てを使わない自然な分析を試みる。アフォーダンスとの関連では、可能表現を取り上げる。共同注意とコミュニケーションについては、ひきつづき可能表現を取り上げるほか、「情意」を伝える表現としての現象描写文などを取り上げて検討する。

<語学部門：特別講演>

懸垂分詞構文から見える日英比較分析—事態認知・事態報告と視点とジャンル

早瀬 尚子 (大阪大学)

分詞節の主語と主節の主語とが一致しない懸垂分詞構文(e.g. *Turning left, there is a ticket office.* (左に曲がるとチケット売り場がある))は、日本語にすれば自然な文だが、英語では奇妙な文とされる。日本語にひきずられて使ってしまうこともあるため、英語教育の現場でも指導の対象となりやすい。しかしコーパスでの実例を眺めると、実際には英語でも使用例が多々認められ、また日本語よりも特定のジャンルに偏ることがわかる。このジャンルの偏りから、この構文が事態認知だけではなく事態報告という対人関係を重視する領域でも好まれていることを明らかにする。さらに、この構文をもとに、分詞節を単独でメトニミー的に用いる新しい表現単位が日英ともに見られるが、それぞれが発展させている意味や使われ方にも差が見られる。この日英差はどこから生じてくるのか、その理由を探る。そして、理論言語学が射程とするジャンルについて再考する必要についても触れたい。

<第二日：10月6日（日）>

<文学部門：研究発表>

*De Profundis*に見る Wilde を監獄へ送った権力

本間 里美（北海道教育大学大学院）

Oscar Wilde(1854-1900)の投獄の理由を、Foucault の *Discipline and Punish*(1975)で定義される権力の性質を基に、*De Profundis*(1905)の言説を通して考察する。Wilde 投獄の発端は、Wilde が恋人 Alfred Douglas の父 Lord Queensberry に侮辱されたとして彼を告発したことにある。しかし権力は流動的である為、反対に Lord Queensberry に男性同性愛の罪で告発され、Wilde は有罪となった。この判決には、産業革命という歴史的背景も関連している。産業革命で財を成した中・上流階級の父親は、子息を同性愛から守る義務があるという社会に根付いた風潮、つまり不可視の権力があつたからである。社会に浸透して不可視化した権力がいかに Wilde を攻囲し投獄へ至らしめたか、*De Profundis*を通して明らかにする。

母性の見なおし—『波』におけるウルフの技巧—

金井 彩香（千歳科学技術大学）

小説『波』（1931）において、ヴァージニア・ウルフは、父権制社会のイデオロギーから解放された自身のライティングを試みる。ウルフは、特定のイデオロギーに属さない人々と人生の継続性をそこに作り出し、女性として書く小説を完成させた。生涯において子供を望みながら叶わなかったことで知られるウルフであるが、彼女の人生にのしかかっていた母性の重みは、その背景にある父権制社会の圧力や母の存在によるものであつた。『波』の創作における姉ヴァネッサの影響、そして同時期のウルフの「母性本能」への言及は、この小説とウルフの母性への意識を結びつけるものである。6人の登場人物のひとつの意識の流れに属するかのような一連の語りによって、ウルフは、「人生の本質」を描くため、語り手である自身の存在を表面には見せない自伝小説としての『波』を作り上げた。

<文学部門：シンポジウム>

Lost/Found in Cinematism—文学作品の映像化をめぐる—

司会・講師：板倉 宏予（北海道薬科大学）

講師：沢辺 裕子（北海道武蔵女子短期大学）

講師：熊谷 由美子（北海道大学）

講師：及川 陽子（北海道大学）

ベストセラー作品は映画化されるものだ。誰だって、スターがああヒーローを演じるとこ

ろを、アクトレスがああヒロインに化身するところを見てみたい。1ページめを開いたその瞬間から読者は常に潜在的視聴者なのだ。そういうわけで、1902年に『月世界旅行』が映画化されて以来、文学作品は映像化され続けてきた。しかし、文章で書かれた文学作品が音と映像で描かれる映画・ドラマへとメディアを移し、作りかえられる際には、否応なしに様々な変化・変質が生じる。映像製作者による意図的な原作からの逸脱には彼ら自身の原作解釈や現実的な制約が反映される。読書の際の各読者の脳内に想起されるイメージの世界から現実の役者たちによって具現化された三次元の世界に作品が移行したことにより、観客の心の中で必然的に生じる変化もある。音という、もともとの文章には存在しなかったものが映像化の際に付加されたことにより得られるものもある。

原作に沿いながらも、原作からは変化・変質したものである映像作品とはいかなる存在であるのだろうか。映像化される際、原作から何が零れおちてしまうのだろうか。映像作品を視聴することで、新たに原作に還元されるものがあるだろうか。本シンポジウムでは、実際の映像・画像・音楽を例示しつつ、各講師が各自のアプローチで文学を原作とする映像作品を論じ、文学作品が映像化された時に得られるもの、失われるものを明らかにしていきたい。

(文責・司会：板倉 宏予)

『ロード・オブ・ザ・リング (旅の仲間)』におけるBGMの使われ方と ゴンドールのボロミアの描写

板倉 宏予 (北海道薬科大学)

文字で書かれている文学作品が映像化される際には、役者の肉体・肉声をはじめとして様々な新要素が付加される。その中でもBGMは、きわめて映像製作者・脚色者側のオリジナル性が高いにもかかわらず、あくまでも作品に沿い、作品の補完・補強を目的として、いわば音楽で描写を行うべく映像作品内で使われている。本発表では、『ロード・オブ・ザ・リング (旅の仲間)』の、特にゴンドールの執政の息子ボロミアが登場する場面でのBGMや効果音の使われ方を検証する。『旅の仲間』は、日本公開当時、日本語字幕に深刻な問題があったため、原作未読の観客が物語を誤読する危険性が生じ、実際にボロミアを裏切り者の悪人と誤解した者も少なからずいた。しかし、BGMと効果音は「高潔な人間が指輪の誘惑に屈し、その過ちを贖って死んでいく」というボロミアの物語を正しく補足し、補強していたのである。

『ハリー・ポッター』映像化のうまい部分とまずい部分

沢辺 裕子 (北海道武蔵女子短期大学)

1997年から10年間で出版された『ハリー・ポッター』シリーズ7巻は、映画も2001年から10年をかけて常に続きが待たれる中で公開された。シリーズが完結する前に映像化が進んだことや、それを複数の監督が手がけたことなどから、全体の統一感には欠けるものの、空前のファンタジー映画ブームの一端を担ったことは間違いない。本発表では、映像化にあたって原作からどのような変更がなされ、それがどのような効果を持ったかを考える。その時点では取るに足りない登場人物をカットすることによって、最終的には原作のテーマの一つまでがカットされてしまう。また映画の性質上、観客の感動を誘うというチープな考えから、

登場人物の感情をねじ曲げてしまうことさえある。しかし一方で、原作を読んでいて見逃してしまうかもしれないことを、映像として台詞として表現することで、より理解が深まるといふ場面もある。映像化にともなう巧拙をエピソードで見てゆく。

現代の映像にみるジェイン・オースティン作品

熊谷 由美子 (北海道大学)

イギリスの映像文化の特色の一つである古典小説の **adaptation** において最も人気があり、次々と新しい版がつくられているのがジェイン・オースティンの作品である。中でも 1995 年の BBC の TV ドラマ『高慢と偏見』は、それ以前の映像化作品のように原作への忠実性 (**fidelity**) に固執するのではなく、忠実性に現代の視聴者を惹きつけるエンターテインメント性を巧みに融合した新たなオースティンの世界を映し出し、イギリス国内外で大ヒットとなった。こうした融合はその後のオースティン作品のドラマや映画にも継承されている。本発表では 1995 年以降の映像化作品における背景、台詞、人物描写などを通して原作への忠実性とエンターテインメント性を考察し、現代の古典小説 **adaptation** の流れを明らかにしたい。

ディケンズ作品映像化における試行錯誤

及川 陽子 (北海道大学)

現代では、古典小説との出逢いがまず映像という形であった、ということが増えてきているし、今後もその流れは続いていくだろう。しかし、素人芝居を好み、公開朗読の場であまりの迫真性に人々を驚かせていたディケンズには、彼なりの想像図が確固として存在していた。その理想に限りなく近づこうとする演出と、現代という時代に沿った形で人々の興味をかきたて、作者の意図を伝えようとする演出と、彼の作品の映像化にあたっては極端な工夫が必要とされている。どちらの演出にも意味があり、視聴者は場合によってはそのまま小説の愛読者となり得るであろうし、場合によっては通りすがりの異邦人で終わってしまうこともあり得るだろう。本発表では、主に『クリスマス・キャロル』における過去・現在・未来の幽霊の映像化におけるさまざまな工夫について比較検討した上で、古典小説を現代によみがえらせ、作者の思想を伝える演出効果について考察する。

<語学部門：研究発表>

間接指令文が選択される機能的要因の分析

鈴木 大路郎 (北海道大学大学院)

本研究では動詞の原型を用いたフラットな命令文と、*Can you~?*、*Would you~?*といった形式をとる間接指令文の使い分けに関わる要因を機能主義的な観点から明らかにする。命令文と間接指令文の選択に影響を与える要因としては、先行研究では、話者と聴者の間の社会的関係(politeness)や、聴者が話者に従う義務、指令内容が聴者に課す負担、といったものが指摘されてきた。しかし本研究では、この問題に対して従来はあまり指摘されてこなかった「話者の欲求」(desire)という観点から分析を試み、話者が指令内容の実現を望めば望むほど間接指令文が用いられやすくなる、という傾向を指摘する。同時に、間接指令文が命令文と比較して、どれほど聴き手に実行されやすいかということにも注目し、このことが話者の欲求という要因と相関的に間接指令文の使用を動機づけている可能性を指摘する。

項削除と(非)焦点化効果

奥 聡 (北海道大学)

Oku (1998)以来、日本語において(1)(2)の発音されないNPは項削除(Argument Ellipsis: AE)により派生されるという議論が盛んに行われている(Takahashi 2013, Saito 2007 など)。

(1) ジョンは、自分の手紙を捨てた。メアリーも [~~NP 自分の手紙を~~] 捨てた

(2) ジョンは [NP 自分の論文が] 通ると思っている。
メアリーも [~~NP 自分の論文が~~] 通ると思っている。

一方、Funakoshi (2012)は(3)が非文であることは、述語内のゼロ要素は動詞句削除 (VPE)により派生されることを示す、と論じている。

(3) ジョンは、メアリーとだけ遊べる。*ビルも [~~メアリーとだけ~~] 遊べる

本発表では、以下の仮説(4)に基づき(3)の事実は必ずしもAEの存在を否定するわけではないことを論じる。さらにAEかVPEかという問題に関して、(4)の観点から、関連データの再考を試みる。

(4) ある要素を焦点化する統語操作とその要素を削除する操作は、同時に行うことはできない

主動詞+to不定詞、または-Ing形の適合性

渡辺 一真 (北海道大学大学院)

本研究では、従来、様々な見解が出されている主動詞とそれに接続するto不定詞と動名詞の使い分け (want to do / avoid doing など)を、意味的・機能的な観点から分析する。その際に、教育現場において有効であると思われる動詞に注目し、教育的指導上、役に立つことを目標とする。

この分析を進める上で、to不定詞と(V-)ingの意味、主動詞との関連から見たto不定詞と

(V)ing の機能、主動詞の語彙的意味、の 3 つの観点を踏まえ、以下の 2 点を述べていく。

1 点目は、コーパス COCA も活用し、JACET8000 を基に抜粋した各動詞のカテゴリー分けを行い、3 つの subsequence フレーム、simultaneity フレーム、anteriority フレームを提案する。

2 点目は、各動詞のスキーマ化、また、そのスキーマと to (不定詞)、(V)ing の意味的性質との関連性を示し、この分野を視覚的に理解するための手段を提示する。

知覚動詞構文の受動文における to do の意味機能について

佐々木 昌太郎 (札幌大学大学院)

知覚動詞構文に関してはこれまでも多くの研究があり、特に上山 (2011) は知覚動詞構文の補部が表す事態を「モノ的把握」と「コト的把握」の 2 通りの解釈が可能であると論じている。この論考は認知文法の視点から言えば受動化の認知操作はランドマークとして認識されている実体をトラジェクターとして捉え直すということであり、事態内参与者を取り出すというモノ的な捉え方が反映しているという点で重要な意味をもつ。そこで本発表では知覚動詞構文は 1 つの構文を形成してはいるが、認知的には文主語が補部の行為の主体を知覚するという事態とその行為の主体がある行為をするという事態の複合体であり、この構文の受動化では前者が Figure として認識され、相対的に後者が Ground として認識され、このように背景化された事態が to do で言語化されることを主張する。そしてこの分析が「原因」「理由」等を表す事態も同様に to do で言語化されることから妥当性を有することを主張する。

<語学部門：シンポジウム>

人間と言語

司会：濱田 英人 (札幌大学)

講師：奥 聡 (北海道大学)

講師：野村 益寛 (北海道大学)

ヒトのことばの起源はおおよそ 180 万年前のホモ・エレクトスの時代と推定されており、彼らの話していた原型言語はその後おおよそ 20 万年前に出現したホモ・サピエンスへの生物進化と共に飛躍的な進化を遂げ、更にその後の人種や民族の分化と共にそれぞれの個別の言語へと発展し、現在では約 6900 の言語があるともされている。ここで重要なことは、当然のことであるが言語は人間と切り離して考えることはできないということであり、もっと言えば、人間が生物進化として脳内に獲得した「言語能力」の反映であり、また、その基本的な「認知能力」を活性化して世界をどのように捉えているかという「事態把握の仕方」を反映しているということである。

そしてこの「言語能力」や「認知能力」は紛れもなく生成理論と認知言語学の中心的な話題 (研究対象) であるわけであるが、言うまでもなく、この 2 つの能力は共に人間の脳内のメカニズムであり、従ってこのことから、それぞれの理論の共働により人間のもつある特性を立体的に捉えることが可能となる。より具体的に言えば、「言語能力」が生物進化の結果と

して人間の脳内に（たとえば、「文法遺伝子」のような形で）実在していることが明らかにされ、その言語能力が概念的必然性（conceptual necessity）を有する併合（merge）、回帰性（recursion）、移動（move）等であるとする、そのそれぞれがどういうものを理解することは言語を解明する上で不可欠であり、また、人間が知覚作用の概念的相似物である認知操作によって事態を解釈し、その身体的経験、特に知覚（視覚）経験から得られたものを抽象化したスキーマを脳内に蓄積して、それによって事態を捉えるという認知メカニズムから言語を考えること、つまり、身体的な動機付けに支えられた一般的な認知プロセスの反映としての言語知識を研究の対象とすることは言語の本質を考える上で極めて重要である。

このシンポジウムではこうした「言語能力」や「認知能力（またその反映としての言語知識）」の視点から言語を捉えることで見えてくる人間の特性、そして言語の本質を明らかにする。

（文責・司会：濱田 英人）

「復習」：理論言語学研究の特徴と実践

奥 聡（北海道大学）

1950年代に起こった認知革命（cognitive revolution = 認知科学の誕生）において、「生成文法」は、その中心的な分野の1つとして多くの研究者から「熱狂的に受け容れられた」（福井 2012: 21）。それから半世紀以上経った現在、この知的プロジェクトの現状はどのようになっているだろうか。本発表では、以下の観点を中心に「生成文法」と呼ばれる言語研究の営みの概略を「復習」してみたい。

- （1）人間に特有の資質（言語能力）の解明を目指すという点で、言語研究は人間とは何かを明らかにしようとする研究分野の1つであること
- （2）人間の生得的資質（UG）が生後の環境刺激を受けることによって個人の脳内に発達する能力の解明を目指すという点で、言語研究は生物学の一分野であるということ
- （3）人間の言語能力を自然科学と同じ方法で研究しようとする（方法論的自然主義 methodological naturalism）
- （4）通常の知覚可能な現象の背後にある高度に抽象的な（数学的）モデルが、実際の現象そのものよりも実在性が高いと考える、ガリレオ的スタイル（Galilean style）を採るということ
- （5）言語現象に対する理論的「説明」を強く志向するという点

どのような研究分野でも、具体的な方法論や概念などの道具立てがなければ実質的な研究はできない。しかし同時に、概念や道具立てを明確にすることによって、その理論で見えてくるものも大きく左右される（「理論負荷性」の問題）。現行の「生成文法（理論）」の一般的な道具立てと、それが得意とする分野・現象、不得手な分野・現象、という問題についても考えてみたい。

認知文法の思考法 — FCGI, Ch.1 を読む

野村 益寛 (北海道大学)

認知文法は、既存の言語理論が立脚する概念的基盤に対して不満を覚えた R. ラネカーが、新たな概念的基盤を一から構築することから始まった。1987年に刊行された *Foundations of Cognitive Grammar* 第1巻 (FCGI) の第1章 Guiding Assumptions は、認知文法の『方法序説』とも呼べる性格をもつ。この章は、1.1. General Assumptions と 1.2. Methodological Assumptions の2つに分かれ、前者では「言語とは何か」に関する前提、後者では「言語理論はいかにあるべきか」に関する前提が扱われる。しかし、後者に関すると思われる「自然さ」の問題が前者で取り上げられたり、前者と後者がどのような対応関係にあるか、これらの前提から何が帰結するかなどが必ずしも明示的に提示されておらず、全体像を理解するのはたやすくはない印象を受ける。

本発表では、この章を能う限り詳細に読み解くことで、認知文法の概念的基盤を整理・提示し、その中に話者、言語がどのように位置づけられているかを明らかにすることを目的とする。そして、生成文法が無媒介性、脱文脈性、没交渉性と特徴づけられる個体能力主義の立場から I-言語を研究対象とするのに対して、認知文法は言語使用を反映した話者の言語知識を研究対象とみなすことで、I-言語と E-言語の質的区別を止揚し、個体能力主義からの脱却を（成否は別として）企てており、この言語観に応じた理論構成をなしていることをみていく。